



新年のごあいさつ

新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様には、健やかに新しい年を迎えられたことと思います。昨年は歴史的災害に見舞われて、これまでの価値観が問い直された厳しい一年でした。今年は何とか平和で穏やかな年でありたいものです。

昭和の時代、宮城県内にはどの市町村にも郷土史家がたくさんおられ、郷土史研究団体を結成し、歴史にとどまらず民話や民謡、民俗芸能、風俗習慣、方言や祭行事などに至るまで、郷土の文化全般にわたって調べあげ、機関誌を発行して成果を発表していました。郷土史家の方々は地域の隅々まで知り尽くし、多く情報を持っておられます。私などは学生の頃からこ

うした郷土史家の方々に大変お世話になりながら遺跡の調査と研究を続けてきたといっても過言ではありません。本棚には今でも『栗原郷土研究』や『郷土わたり』といった雑誌類がたくさん並んでいます。

ところが昭和50年代頃からでしょうか、こうした郷土史家の方々が次第に減り、郷土史研究も低調になってきたように感じられ、少し寂しく思っておりました。これは市町村に文化財保護行政を担当する専門職員が配置されるようになったことも一つの要因で、それを推進してきた者としての責任も感じていたところでした。

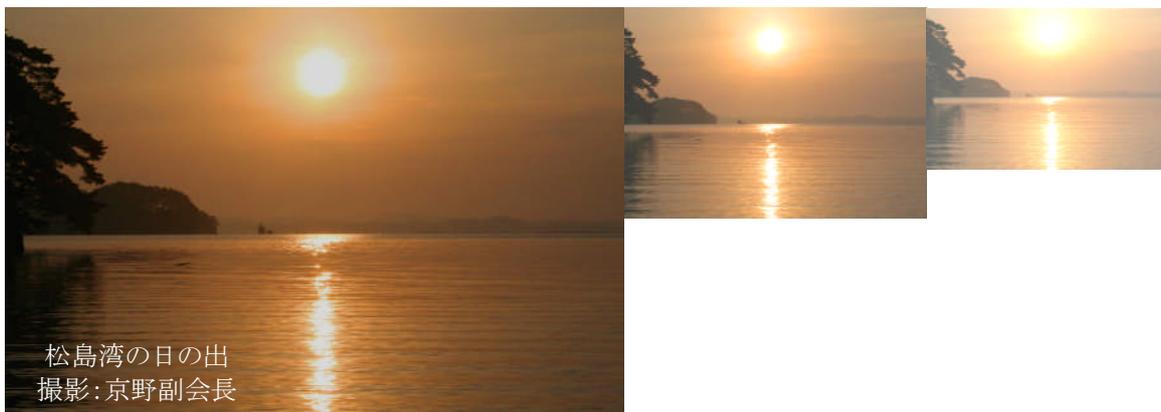
こうした中、宮城地区には関山街道周辺の歴史文化について熱い思いで調査に当たっておられる郷土史研究団体が今なお健在で、5月26日に開催する「関山街道フォーラム」に多くの団体にご参加いただくことになり、大変心強く思っております。

今回のフォーラムは、関山街道についてご研究を続けておられる東北大学東北アジア研究センターの平川新教授、郷土を愛し歴史文化の調査を続けておられる地域の郷土史研究団体、そして関山街道沿いの資源を活かして地域の活性化に結びつける活動を行っている市民団体が、互いに成果を出し合い、情報を共有しながら、今後の連携を模索する初めての試みであります。活発に活動する多くの郷土史研究団体の参加により、このフォーラムで大きな成果を残せることをおおいに期待しています。



平成24年正月

会長 白鳥良一



松島湾の日の出
撮影:京野副会長

【事務局より】

新年号は、会長の年頭ごあいさつ、京野副会長投稿レポートと前月号に収まりきらなかった昨秋の街道イベント報告といたしました。

これからも内容に充実に努めて参りますので、今年もよろしくお願いたします。

なお、会長の新年のごあいさつの中にある「関山街道フォーラム」については、実行委員会（委員長：平川先生）を発足し、詳細な内容を現在検討中です。詳細が決定したらお知らせいたします。なお、5月26日の開催は決定していますので、スケジュールの確保をお願いいたします。（たにしー&とし）



〒980-0014
仙台市青葉区本町1-13-32
オーロラビル2F

TEL: 022-722-3380
FAX: 022-722-3381
Mail to: miyagi-kaidou@auone.jp

手樽村古浦出身・土井喜三郎の偉業

みやぎ街道交流会 副会長 京野 英一

松尾芭蕉翁が『奥の細道』の旅で松島を訪ねた頃、手樽村古浦で生まれた土井喜三郎という商人の偉業を紹介したい。

はじめに、寛文年間、宮城郡市川村（現在の多賀城市）から出土した多賀城址・壺の碑は、天和二年（1682）京都・井筒屋発刊の『松島眺望集』や元禄十五年（1702）に発刊された『奥の細道』などに紹介された。

以後、この碑は平安以降に詠まれた陸奥の代表的な歌枕と認知された。

「陸奥のいはでしのおぼはそ知らぬ書き尽くして壺の碑 源 頼朝」

『新古今集より』

「疑いなき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一徳、存命の喜び、羈旅の労を忘れて涙も落ちるばかり也」『奥の細道』壺の碑より

さらには当時、副將軍とよばれた大納言・水戸光圀から仙台藩主・四代綱村公への進言があり、壺の碑保存のため、遺跡を鞘堂で覆うようになったという逸話も伝えられている。

幕府の学術文化振興という当時の風潮にも影響されて、「奥の細道」を辿り、壺の碑を訪ねる全国の文人墨客が仙台北城下を経て塩竈街道を行き交ったようである。

享保十四（1729）、翁の旅から数えて丁度四十年後の同じ五月に、壺の碑を案内する二基の道標が街道沿いに建てられた。現在は一基が鞘堂前に移設されている。この道標を建てたのが、越後屋喜三郎という古浦（松島町手樽）出身の商人である。とりわけ特筆されるのは、当時の日本を代表する書家・奈良・平城京の国府として、天平宝字六年（762）十二月一日建立にあやかつての依頼と推察されるからである。

次に、四代藩主・綱村公以前の塩竈神社参道入口は七曲坂にあり、現在の参道入口・西町は芭蕉翁が旅した後に出来た町屋である。



享保十六年（1731）十月、七曲坂入口に道標を建立したのも越後屋喜三郎であり、「塩竈昆布所」と刻まれ、現存している。筆者の調査によると、この道標は「しるべ石」として塩竈街道の基点を成したようで、仙台北目町を基点とした初期の塩竈街道・四里二十二丁四十八間（正保国絵図記載より）と思われる。現在の塩竈市資料によると、「しるべ石」は当時の塩竈宿の東西南北を記した基点と紹介がある。なお、塩竈街道が赤坂を経て西町に通じた以降、街道里程も四里十八丁に改まり、西町の表坂が栄えて越後屋喜三郎はじめ有力な商人は、西側の赤坂・西町方面に移転している。最後に、塩竈宿の商人として莫大な財産を築いた喜三郎は、塩竈神社への信望も篤く、多くの社家とも親しかったようである。喜三郎製造の花昆布は、仙台藩主参詣の度に献上された逸品であった。とりわけ社家の藤塚知明は藩主とも親交が篤く、この花昆布は、元文四年（1739）、京都・武者小路中納言（献上の榮譽に預かった。その折、左記の古歌を賜り、以後「浅みどり」と称された。

ながむ

詠れは八十島かけて浅みどり

霞みそたてるしほかまの浦

この浅みどりは、全国に名を馳せる奥州仙台北藩を代表する名産品となり、越後屋の名声は高まるばかりであった。しかし、明治以降の越後屋は廃業となり、塩竈在住の末裔の方が喜三郎の墓を見守つていると聞く。喜三郎の妻は、現在の手樽古浦の墓地・土井家（西の家）に眠っている。法名碑には「宝曆四年（1754）十月二日 四十六才」と刻まれている。

藩政時代に松島出身の土井喜三郎が、商人として成功しただけでなく、貴重な道標を複数遺した偉業は、地域の方々に殆んど知られていない。全国的に「地産地消」という地域活性化策が叫ばれて久しいだけに、「浅みどり」復活を待ちたい。

参考文献

『宮城縣史』金石史、『奥塩地名集』、『塩竈市史』、『多賀城市史』、『東講商人鑑』塩竈町と市川村の安永「風土記御用書出」他



法名碑



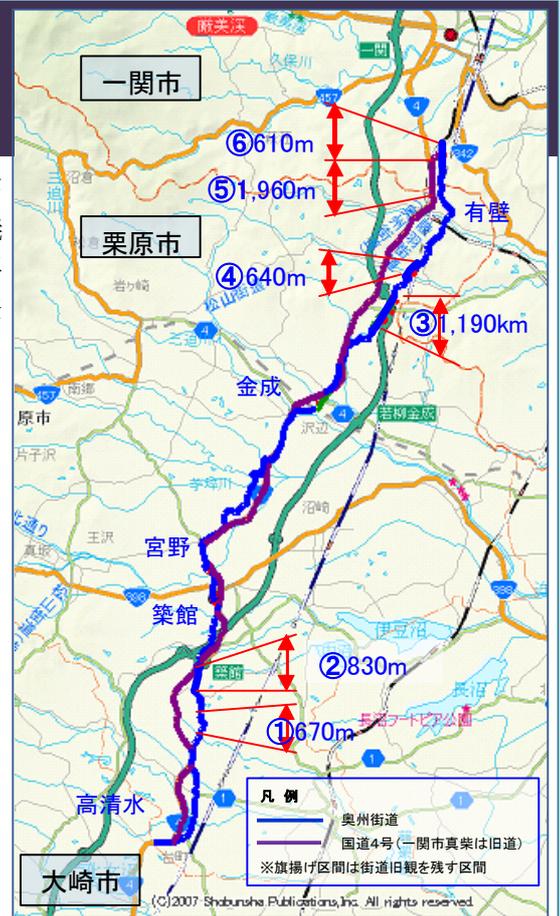
喜三郎妻の眠る土井家の墓

栗原の奥州街道の取り組み

みやぎ街道交流会は発足以来、街道の旧観を良く残している栗原市高清水から一関市真柴（鬼死骸）の奥州街道について、くりはら街道会議と協働して、街道の保存と活用のための活動に取り組んで来ました。平成22年からは、有壁地区独自や岩手県の活動団体と連携した活動に発展して来ていますが、平成23年の活動内容について報告します。

栗原市奥州街道関連の主なあゆみ

No	年月日	項目
1	H19年 8月/9月	奥州街道を歩いてみる会/奥州街道探訪会
2	11月	みやぎ街道交流会交流大会・探訪会
3	H20年 2月2日	「くりはら街道会議」設立
4	2月/11月	奥州街道調査(十万坂/築館地区)
5	H21年 2月/4月	奥州街道調査(築館地区/金成・夜盗坂付近)
6	11月～2月	ガイド養成講座(5回)
7	12月19日	奥州街道(金成・夜盗坂付近) 苧り払い
8	H22年 3月末	栗原市奥州街道マップ完成
9	5月8日	奥州街道(鬼死骸付近) 調査
10	10月11日	道しるべ設置(37箇所)
11	10月24日	「旧奥州街道時代散歩」開催(新鹿野～県境)
12	11月20日	奥州街道一関市鬼死骸地区苧り払い
13	H23年 7月3日	「旧奥州街道時代散歩」開催(新鹿野～県境)
14	8月27日	一関市鬼死骸橋梁架設
15	10月23日	一関市鬼死骸地区苧り払い
16	11月3日	「奥州街道時代ウォーク」開催(有壁～一関・武家住宅)



奥州街道(大崎市境～一関市境)

◆旧奥州街道時代散歩 (詳細は「みやぎ街道交流会ニュース16号」をご覧ください。)

2回目となる今年は、くりはらツーリズムネットワークの主催、有壁地区の実行委員会の主管により、平成23年7月3日(日)、30名が参加して開催されました。探訪コースは新鹿野一里塚～十万坂～有壁宿～岩手県境までの約6kmの奥州街道です。

◆奥州街道鬼死骸地区橋梁架設

平成23年8月27日(土)奥州街道鬼死骸地区(一関市)の橋梁架設がいわて街道交流会の15名により行われました。この箇所は、平成22年11月の苧り払い区間の南端付近にある溜め池の堤防決壊ヶ所で、安全な歩行が困難なことから課題となっていました。長さ3m、幅1.5mの木橋が完成したことにより、快適な街道歩きが可能となりました。



◆奥州街道鬼死骸地区苧り払い

平成23年10月23日(日)奥州街道苧り払い(一関市鬼死骸地区)が行われました。この区間は平成22年11月にも苧り払いを行いました。11月3日に開催される「紅葉の奥州街道時代ウォーク」に先立ち、くりはらツーリズムネットワーク、有壁助郷の会が呼びかけ、みやぎ街道交流会、くりはら街道会議、栗原市田園観光課と、一関側からいわいの里ガイドの会、たびれっじ推進協議会、草刈アート事務局、一関市の参加により、計17名により行われたものです。



◆紅葉の奥州街道時代ウォーク

平成23年11月3日(文化の日)、くりはら博覧会「らいん」プログラム「紅葉の奥州街道時代ウォーク」が有壁助郷の会の主催、たびれっじ推進協議会、いわいの里ガイドの会の協力により、約40名が参加して開催されました。平成22年10月、平成23年7月と3回目となります。(平成23年3月予定は大震災により中止) 探訪コースは、JR有壁駅～有壁本陣～肘曲坂～鬼死骸～(昼食)～鬼石(鬼死骸の地名由来)～明治天皇御小次遺趾碑～豊吉の墓～迫街道追分石～釣山公園～時の太鼓～旧沼田家武家住宅までの約9kmです。昼食後からは、「いわいの里ガイドの会」が案内し、栗原から一関へと連携が進みつつあることを実感しました。一関からはバスで有壁に戻り、萩の鶴の萩野酒造で本物の美味しい甘酒をご馳走になりました。



第7回羽州街道交流会 大館大会レポート

平成23年11月12(土)、13(日)、第7回羽州街道交流会大館大会が「道の駅」矢立峠(大館矢立ハイツ)を主会場に開催され、大館市制60周年の記念イベントにも位置付けされています。矢立峠は、秋田・青森県境(久保田・津軽藩境)に位置し、旧羽州街道と国道7号及びJR奥羽本線の交通ネットワークが集中する要衝で、杉の林立するすばらしい景観の中に矢立ハイツがあります。

◆ 「曲げわっぱの話あれこれ」と題して、講師は大館市立博物館で美術工芸を担当している学芸員の荒谷由季子氏です。曲げわっぱは、秋田音頭に「♪ 秋田の名物 …能代春慶 大館曲げわっぱ…」とあり、国の伝統工芸品に指定され、天然秋田杉を薄く剥いで成形したもので、弁当箱、菓子容器、おひつなどに加工され人気が高いそうです。17世紀後半に大館藩主・佐竹西家が下級武士の副業として奨励し、発達したのですが、大館はたびたび大火に見舞われたため、過去の資料は少なく、その歴史や発展過程は不明な点が多く、今回はその歴史、杉桶樽との関連及び材料となる天然秋田杉にいたる曲げわっぱ全般について、ご自身の調査・研究の成果を講演頂きました。

◆ 第1分科会

「羽州街道と吉田松陰」と題して、パネラーを小笠原豊氏(吉田松陰と陸羯南を顕彰する(財)養成会代表/弘前市)、清野宏隆氏(大館市文化財保護協会事務局長)、武田光應氏(大館ハチ公の里案内人の会会長)の3名、コーディネーターは島津憲一氏(羽州街道交流会代表)で進められました。松陰は、嘉永4年12月14日より翌5年4月5日まで、肥後藩士宮部鼎蔵との東北海防事情を確かめるための旅を「東北遊日記」として著していますが、この旅では羽州街道を久保田～大館～矢立峠～弘前まで歩いています。大館には松下村塾の模築、白沢の宿泊地碑、矢立峠の歌碑があり、弘前には談話した松陰室が残されているなど関連資産が多くあります。松陰に関心の高いパネラーが、松陰の旅からの思いを熱っぽく語り合いました。

◆ 第2分科会

「廃校を活用した食づくり」と題して、パネラーを庄司博司氏(NPO 法人四季の学校・谷口理事長/山形県金山町)、金子祐二氏(秋田と東京赤坂で地中海料理レストラン経営。大館市旧山田小学校校舎を活用した生ハム工房を立ち上げ)の2名、コーディネーターは山田里美氏(NPO 法人NPO 推進青森会議事業統括マネージャー)で進められました。各地で廃校の有効活用が課題になっていますが、廃校活用の先進好事例の関係者の2名が、その背景にあった苦労、喜び、優位性を話し合いました。

◆ 街道談義

恒例の街道談義(交流会)は、地元の粕田酒こし舞保存会の皆さんによる酒の仕込みから出来上がるまでの面白可笑しい「酒こし舞」で始まり、きりたんぼ鍋などの郷土料理と恒例の地酒自慢による各地の地酒を堪能しました。



◆ 街道探訪会1コース「矢立峠探訪と大館郷土博物館見学」

交流会会場の矢立ハイツを8:30に出発し、矢立峠歴史の道を周回するコースを散策しました。秋田杉の風景林の中、古街道の分岐までは割と平坦な遊歩道でした。秋田杉は、1991年9月に来襲した台風19号による倒木など記録的な被害があったそうです。さらに進むと「伊能忠敬」測量隊記念碑や江戸末期に吉田松陰が訪れた際に詠んだ「漢詩」の碑、新しい矢立峠一里塚跡の石柱などの案内板が整備されていました。矢立峠由来の地では、案内人の中村氏が、3代目(?)の植林式を企画されるサプライズもありました。天明5年(1785)には菅江真澄、明治初期には英国人旅行家イザベラバードも通って「私は日本で今まで見たどの峠よりもこの峠を賞め讃えたい。」と記されています。昼は銘々の車で、個人的な観光旅行であれば立ち寄らないと思われる、鳥潟会館(300年余りの歴史を持つ旧家)に移動し、有名なり弁当に舌鼓。建物は5年の歳月と延べ1000人を超える京都の大工、左官の手によって補修、増築され、県内有数の文化資産となっています。最後は基調講演でご講演いただいた荒谷氏に、大館郷土博物館をじっくり案内していただきました。地域の風土や文化をわかりやすく展示した施設で、是非立ち寄られることをお勧めします。(横山記)



◆ 街道探訪会2コース「大館史跡めぐり」

前日第1分科会パネラーの清野宏隆氏の案内で、大館城跡～遍照寺～大館八幡神社～部垂町・部垂八幡神社～狩野良知・良吉生家跡(石田ローズガーデン)～愛宕神社～田町～大町～(昼食)～常磐木町(足軽町)～大館神明社～松下村塾(模築)～寺町(蓮荘寺・浄応寺・玉林寺・宗福寺)～長倉町～大館城跡で14時解散のコース(約7km)です。昼食は、名物「比内地鶏親子どんぶり」でした。大館市は、戦国期の浅利一族の滅亡により秋田氏、その後、国替えにより佐竹氏が支配しました。小場義成が入城し城代となり、後に佐竹姓を名乗り、その後佐竹西家となって幕末を向かえます。戊辰戦争で南部軍から攻められ落城し、城下町も建物がほとんど焼かれてしまったそうですが、城下町の面影は随所に見られます。大館八幡神社では、街道探訪会ならではの特別待遇で藩主以外は入れない国重要文化財指定の神殿2棟のさや堂の中に入ることが出来、写真も撮らせていただきました。また、松下村塾は、松陰の偉大さ、教育の重要性を知って貰い優れた教育者、大志を抱いた青年を育てることを目的に地元出身で竹村吉右衛門氏(住友生命相談役)の発願によるもので、(財)大館鳳鳴高校振興会が昭和59年に設置し、管理もしているそうです。(山屋記)

